



埼玉の歌人たち

—短歌への八つの想い—

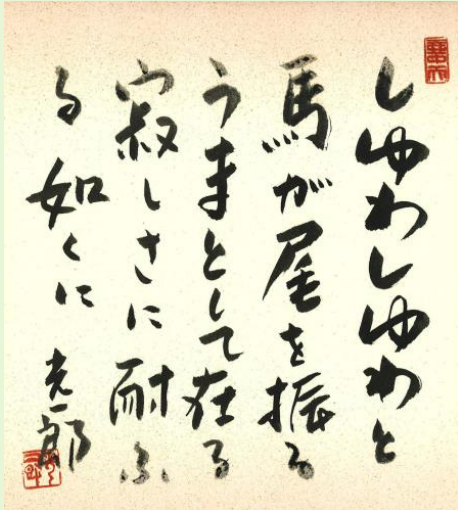
2022年7月7日(木)～9月4日(月)

県内に在住する八人の歌人が詠んだ自筆の色紙や原稿などを展示します。

No	種別	内 容	所蔵
1	自筆色紙	「風の音ふいとだえて楽章と楽章の間のごとき寂けさ」 杜澤光一郎 筆	田中愛子氏
2	自筆色紙	「しゆわしゆわと馬が尾を振るうまとして在る寂しさに耐ふる如くに」 杜澤光一郎 筆	
3	書籍(歌集)	『黙唱(短歌新聞社文庫)』 杜澤光一郎 著 2005年刊行・初版 短歌新聞社	
4	自筆短冊	「山羊座にて幸よぶはみどりとぞ蓬摘みゆく牧神の野辺」 関根榮子 筆	関根榮子氏
5	書籍(歌集)	『牧神の野辺』 関根榮子 著 1995年刊行・初版 短歌新聞社	
6	自筆色紙	「遠き日の臨死に見しごと尾根道に白山桜散り狂いおり」 関根榮子 筆	
7	書籍(歌集)	『虹の時間』 関根榮子 著 1999年刊行・初版 短歌新聞社	御供平佑氏
8	自筆色紙	「あさぞらをゆく鷺一つ有明の月の白さに透けつつならぶ」 御供平佑 筆	
9	書籍(歌集)	『傘』 御供平佑 著 2020年刊行・初版 ながらみ書房	
10	自筆原稿	「越谷」 御供平佑 筆	荻本清子氏
11	自筆原稿	「白鳥の川 深谷・本田河原」 荻本清子 筆	
12	書籍(歌集)	『夕宴』 荻本清子 著 2014年刊行・初版 ながらみ書房	
13	自筆色紙	「古代より寄せ返す波大海に帰りゆくひとつ歌のころは」 荻本清子 筆	中西洋子氏
14	書籍(歌集)	『銀河街道』 荻本清子 著 2006年刊行・初版 角川書店	
15	自筆短冊	「はきよする木の葉こもれ陽蟬の殻われのぬけがらまじりてゐずや」 中西洋子 筆	
16	自筆短冊	「みなづきの茂りにしげる草の庭流されびととなりて、こまれる」 中西洋子 筆	金子正男氏
17	自筆色紙	「いくさ世、疫病世はた天災世たえぬあめつちわれら生きつぐ」 中西洋子 筆	
18	書籍(歌集)	『渚の書』 中西洋子 著 2012年刊行・初版 角川書店	
19	自筆原稿	金子正男自筆原稿	さいとうなおこ氏
20	書籍(歌集)	『傘杉峠』 金子正男 著 2012年刊行・初版 角川書店	
21	自筆色紙	「咳きこみのいまだ止まらぬ身励まして登らんとすも木々芽吹く山」 金子正男 筆	
22	自筆色紙	「逆光のしだれざくらは柔らかき雪崩となりて人を隠せり」 さいとうなおこ 筆	平林静代氏
23	自筆原稿	「『逆光』より」 さいとうなおこ 筆	
24	書籍(歌集)	『逆光』 さいとうなおこ 著 2008年刊行・初版 北冬舎	
25	自筆色紙	「咲き初めてこまかき影を散らす寂黙してひとひ秋風とゐる」 平林静代 筆	当館蔵
26	自筆色紙	「ふるさとの井戸の底ひに沈んでる青いガラスの空がいちまい」 平林静代 筆	
27	自筆短冊	「逢はずとも深くところに在るひとよひとひら赤きゆふぐれの雲」 平林静代 筆	
28	書籍(歌集)	『点の記』 平林静代 著 2017年刊行・初版 かりん叢書	当館蔵
29	機関誌	「埼玉縣歌人會會報」No.1 1955年4月10日発行(大西民子所蔵)	
30	機関誌	「埼玉歌人」No.38 1989年7月1日発行(大西民子所蔵)	

杜澤 光一郎(とざわ こういちろう)

1936年、埼玉県浦和市(現・さいたま市)の薬王山報恩寺やくおうざんほうおんじに生まれる。1954年、「コスモス短歌会」に入会し歌人・宮柊二みやしゅうじに師事する。その後、コスモス賞を受賞、同会の選者となる。埼玉県歌人会会長にも就任した。埼玉文芸賞選考委員、「埼玉新聞」歌壇選者、日本歌人クラブ参与をつとめた。過去に、蜷川幸雄ながわゆきお演出の舞台に出演したことがある。2022年5月ご逝去。
『黙唱』や『青の時代』などの歌集がある。



【田中愛子氏解説】

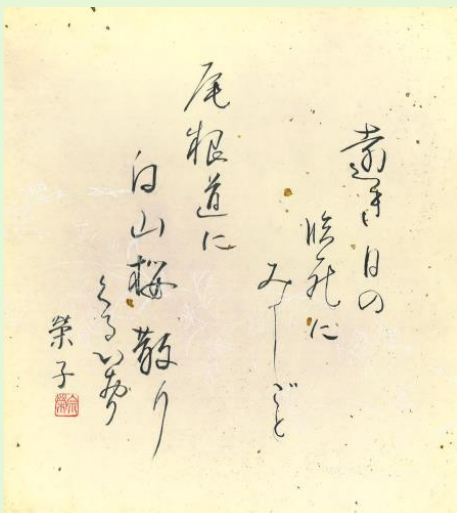
歌集『黙唱』の「馬」四首中の一。馬が馬として存在することの寂しさが詠われるが、それは生きとし生けるもののつながりの中にあり、人間の存在であって、すなわち作者自身の寂しさでもある。しゆわしゆわというオノマトペがとおく寂しさをを呼ぶ。

杜澤光一郎自筆色紙

「しゆわしゆわと馬が尾を振るうまとして在る寂しさに耐ふる如くに」(No.2)

関根 榮子(せきね えいこ)

1937年、埼玉県菖蒲町(現・久喜市)に生まれる。10代より作歌をはじめた。1969年より、「地中海」に所属し、歌人・香川進かがわすすむに師事する。現在、「百代草短歌会」を主宰。埼玉県歌人会新人賞、埼玉文学賞、埼玉県文化団体連合会長賞、日本歌人クラブ・ブロック賞等を受賞。現代歌人協会会員。
『風いくたび』や『椿の門』などの歌集がある。



【著者解説】

私は20代の時交通事故に遭い6時間余り意識不明だったことがある。もう駄目だといわれたらしい。意識の覚めぎわだったのか、雪なのか花なのかとにかくただただ真白いものが舞っていた。50代の頃の山歩きで大木の白山桜の花吹雪に逢った。強烈に事故の記憶が甦って生まれた一首である。

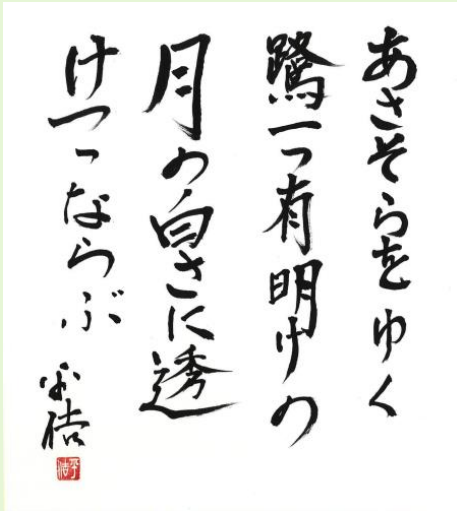
関根榮子自筆色紙

「遠き日の臨死に見しごと尾根道に白山桜散り狂いおり」(No.6)

御供 平信(みとも へいきち)



1944年、群馬県に生まれる(1987年に埼玉県越谷市に転居)。
叔父に短歌を習い、1963年「国民文学」に入会する。歌人の
まつむらえいいち ちよくに いち
松村英一や、千代国一に師事し、現在「国民文学」の発行人を
つとめる。埼玉県歌人会会長、日本歌人クラブ中央幹事、現
代歌人協会理事を歴任。「昭和十九年の会」結成に参加する。
かだんだんきゆう いなすま
『河岸段丘』、『冬の稲妻』などの歌集がある。



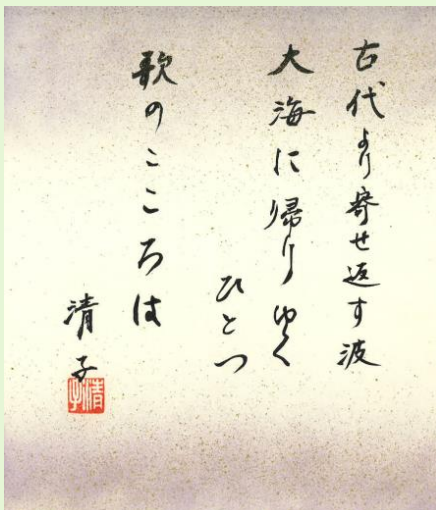
【著者解説】

早朝の散歩に、越谷の宮内庁の鴨場と元荒川に
続く川原に立つと昨夜の窓に明るかった月がやや
西にかがやきを収めて残り、白鷺が1羽西へ向かっ
て高だかと飛んで行く。まだ登らない朝日に明るお
空に張付いた月が1枚の不動の氷のように薄白く透
けていないか。たおたと行く鷺も、優美な両羽が
白く透けて並んだのである。

荻本 清子(おぎもと きよこ)



1937年、愛知県に生まれる(1964年に埼玉県浦和市(現・さい
たま市)に転居)。1957年、「ポトナム短歌会」に入会。1967年には、
歌人・前田透まえだとおるによる第三期「詩歌」復刊に参加した。前田の没
後、「歌界の会」を創設する。現代歌人協会会員、日本文藝家
協会会員、日本近代文学館会員となり、埼玉県歌人会の事務
局も担当した。
かわ あし ぎんがかいどう
『河と葦』や『銀河街道』などの歌集がある。



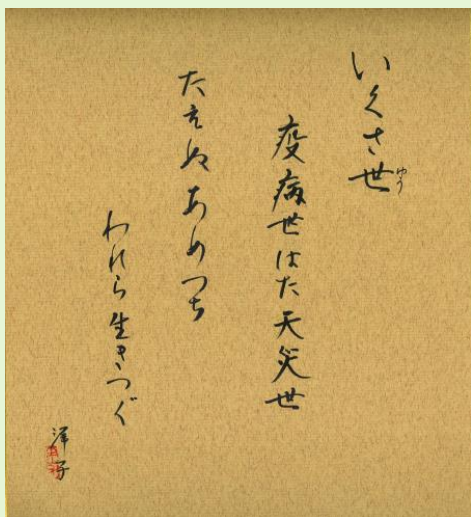
【著者解説】

夜、就寝の前の床に横たわっていると、遠い海から
の波音が聞こえてきて、寄せては戻ってゆく白波が脳
裡をよぎる。一人旅の夜の薄暗で聞いたあの波音
がする。古代から現代に到る歌の幾首かが浮かび
あがる。わが歌の道導のように、ころの深みから思
いを韻律に乗せてみた。

荻本清子自筆色紙
「古代より寄せ返す波大海に帰りゆくひとつ歌のころは」(No.13)

中西 洋子(なかにし ようこ)

1941年、三重県に生まれる(2000年前後に埼玉県春日部市に転居)。1973年、歌人・岡野弘彦^{おかのひろひこ}が主宰する「人」の創刊と同時に参加。1998年、「相聞」^{そうもん}を創刊し現在に至る。歌人、歌集研究として柳原白蓮^{やなぎはらびれん}、釈 迢空^{しゃくちょうくう}を対象としている。埼玉県歌人会理事、現代歌人協会会員、日本歌人クラブ会員をつとめる。『草流離』^{くさりゆうり}や『雲出川』^{くもすがわ}などの歌集がある。



【著者解説】

上句の「世」は沖縄では「ゆう」、「ゆ」と発音する。ここでは音数を整えるために用いたので特に必然性はない。77年前の敗戦間際に日本で唯一の地上戦が行われたこと、今年本土復帰50年を迎えたことがなどが揺曳^{ようえい}しているかもしれない。漢字二語の使用がしらべに障るきらいがあるが、地球上に生きるわれら人類への信頼をこめようとしたものである。

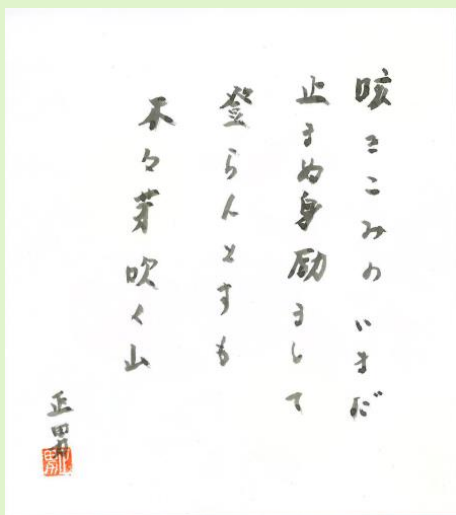
中西洋子自筆色紙

「いくさ世、疫病世はた天災世たえぬあめつちわれら生きつぐ」(No.17)

金子 正男(かねこ まさお)

1933年、埼玉県志木市に生まれる。1957年、「長風」^{ちようふう}の創刊に参加し、鈴木幸輔^{すずきこうすけ}に師事する。現在「長風」選者・編集委員をつとめる。「盲父」50首が第7回短歌研究新人賞候補となる。埼玉県歌人会理事、現代歌人協会会員、日本歌人クラブ参与をつとめる。

『盲の父』^{めしい}のほか、『糸を撚る』^よなどの歌集がある。



【著者解説】

越生^{くろやまさんたき}の黒山三滝の傍の細い山道を登ってゆくと、両側に幹の真っすぐな杉、桧が鬱蒼^{うっそう}と茂る。この辺りを「傘杉峠」^{かさすぎとうげ}と呼ぶようだ。この日私以外に人影はなく、森閑とした山道に熊でも出て来そうな気配であった。「咳きこみのいまだ止まぬ身」は、たまたま某社から作品依頼もあり、少し無理しての山歩きとなった。

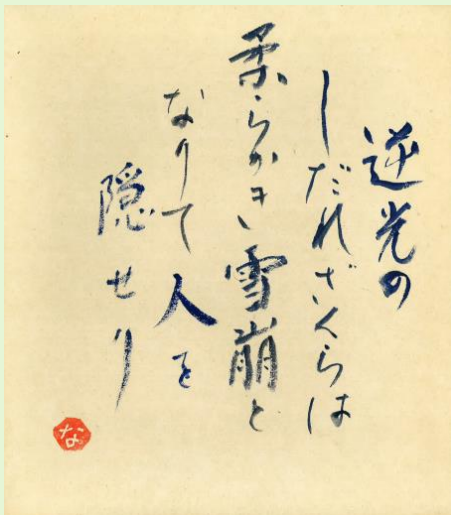
金子正男自筆色紙

「咳きこみのいまだ止まぬ身励まして登らんとすも木々芽吹く山」(No.21)

さいとう なおこ

1943年、朝鮮全羅北道群山ちょうせんぜんらほくどうぐんざんに生まれる(1967年に埼玉県所沢市に転居)。1973年、「未来短歌会」に入会し、歌人・近藤芳美に師事する。2007年、大西民子随筆集『まぼろしは見えなかった』の編集メンバーに加わる。2009年、『逆光』にて埼玉県歌人會賞を受賞する。現在、「未来」選者、現代歌人協會会員。

『逆光』のほか、『キンポウゲ通信』などの歌集がある。

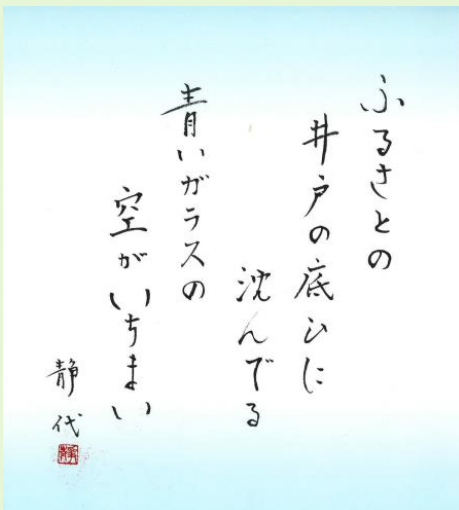


【著者解説】

ある日、丸山公園の枝垂桜しだれざくらの下で人と会う約束をした。わたしの人生で最大の悩みを抱えていた頃のことである。鬱々うつうつとしながら樹を見上げたとき、銀色の雪崩のように見えた桜のすがたを忘れることはないだろう。

平林 静代(ひらばやし しずよ)

1941年、埼玉県入間郡福岡村(現・ふじみ野市)に生まれる。1978年に「かりん」創刊に参加し、歌人・馬場あき子に師事する。1993年に「彩短歌会」を発足し代表となる。1994年、現代歌人協會会員となる。2005年、さいたま市立大宮図書館文学資料専門員となる。2006年には埼玉県歌人會副会長をつとめた。『願浜』、『雨水の橋』などの歌集がある。



【著者解説】

幼いころ住んでいた家の庭隅に大きな井戸があった。釣瓶をぽちゃんと落とし水を汲み上げていた若い母の姿が目につく。夏にはスイカやトマトを冷やし縁側で食べた。楽しい思い出がある一方で井戸に対する畏怖もあった。覗いてみると深い底に吸い込まれそうで怖かった。今は埋められて跡形もないが、私の心の中に懐かしさと畏怖を沈めてガラスのような青い空を映した井戸がありありと在る。

「歴代事務局回顧 草創のころ」

事務局を担当していた大西民子が、
結成まもない頃の埼玉県歌人会を回想したエッセイ

弊衣破帽、それでいてダンディな石川信夫氏、烏打帽のよく似合った大野誠夫氏、哲学者のような風貌の鈴木幸輔氏、温顔を絶やすことのなかった小笠原文夫氏、今は故人と
なられたこれらの方々と秩父の風をいつも身にまといあられる中津賢吉氏、背が高く
飄然と見える狩野登美次氏、端正な青年実業家であられた加藤克巳氏、これら七人の
方々が、常任委員として草創期の埼玉県歌人会を指導された。昭和二十九年、まだ駆け
出しの歌詠みであった私は、これら憧れの先進の方々と接することのよろこびを代償として、
事務局の仕事昭和四十二年ごろまで続けた。はじめのころはまだ日本全体が貧しいころ
で、年間百円という会費もなかなか集まらないのであった。みんなで七千円ぐらしか集ま
らない年もあった。でも、最高のリーダーを戴いて、事務局の私が手ぬかりを叱られることは
あっても、俗事にまつわる争いなど一度も無くて三十五年過ぎたのではなからうか。みんな
別々の歌風を持っておられたが、お互いの歌業を畏敬しあってここまで美事な団体に育った
と思う。

「埼玉歌人」No.38 より



「埼玉縣歌人會會報」No.1
1950年4月10日発行(No.29)
埼玉県歌人会が発足して初めて発行された会報



「埼玉歌人」No.38
(埼玉県歌人会発足 35 周年記念号)
1989年7月1日発行(No.30)

◆今回の企画展にあたり、各歌人の歌集のほか、『現代短歌大事典』(篠弘ほか/監修 三省堂 2000年)、
『改訂版 埼玉短歌事典』(埼玉県歌人会/編集 埼玉短歌事典刊行委員会事務局 2017年)を参考とした。

大西民子 (1924~1994)

戦後を代表する女流歌人のひとり。
岩手県盛岡市出身。25歳の時に大宮へ移り住む。自身の日常生活を赤
裸々に詠んだ第一歌集『まぼろしの椅子』で注目を集める。『風水』で
遼空賞を受賞。紫綬褒章受賞。1994年死去、享年69。



2022年7月7日
さいたま市立大宮図書館
さいたま市大宮区吉敷町1-124-1
電話 048-643-3701 FAX 048-648-8460